

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：30103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02073

研究課題名(和文) 社会的ひきこもりや暴力等の不適応行動に対する家族支援プログラムの普及と効果検証

研究課題名(英文) Dissemination and effectiveness verification of family support program for maladaptive behavior such as Hikikomori (social withdrawal) and violence

研究代表者

山本 彩 (Yamamoto, Aya)

札幌学院大学・心理学部・教授

研究者番号：80758706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：厚生労働省班研究は依存症で効果が実証されている家族支援プログラムCommunity Reinforcement and Family Training(以下、CRAFT)の、社会的ひきこもりへの適用可能性を示唆した。しかし2017年時点では日本でのCRAFTの普及は緩やかで介入の質が保障された臨床試験は存在しない状況だった。そこで本研究では最初にCRAFTの普及及び支援者養成システムの構築を行い、その後介入の質が保障された臨床試験を9人の研究協力支援者に実施してもらった。その結果CRAFTは社会的ひきこもりにも効果があることが推察された。また普及や実装に向けて解決されるべき課題も示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的ひきこもりの要因や状況は人によって様々であり、中には困りを抱え支援につながりたいという潜在的なニーズを持つ当事者も多くいると推察されている。また当事者の家族からは、「どこに相談に行ったらよいかわからない」「たらいまわしにあった」「支援者に本人が来ないと何もできないと言われた」という声も多く聞く。そういった状況に対し、CRAFTを用いることで体系的に家族を支援し、間接的に当事者に関わることができる。

本研究により介入の質が保障されたCRAFTの効果を検証することができた。また、今後の普及や実装、研究に向けて課題を整理することもできた。今後の臨床と研究の連動に寄与する研究になったと考える。

研究成果の概要(英文)：Research supported by the Ministry of Health, Labor and Welfare suggested the possibility of applying the family support program “Community Reinforcement and Family Training” (hereinafter “CRAFT”), which has been proven to be effective in the field of addiction, to Hikikomori(social withdrawal). However, as of 2017, diffusion of CRAFT in Japan has been slow, and there have been no clinical trials in which the quality of intervention was guaranteed. Therefore, in this study, we first established a system to disseminate CRAFT and train supporters in Japan. Then, a clinical trial in which the quality of intervention was guaranteed was conducted by nine research collaborators. The results suggest that CRAFT is also effective for Hikikomori (social withdrawal) and indicate factors that should be specifically addressed in the future.

研究分野：臨床心理学

キーワード：CRAFT 社会的ひきこもり A/CRA/FT 家族支援 認知行動療法 CRA 自閉スペクトラム症 コミュニティ強化

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 (共通)

1 . 研究開始当初の背景

厚生労働省班研究は『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』(齊藤, 2010) の中で, 社会的ひきこもりと同様に本人の支援拒否が多い依存症領域で効果が実証されている家族支援プログラム Community Reinforcement and Family Training (以下, CRAFT) の, 社会的ひきこもりへの適用可能性を示唆した。CRAFT は認知行動療法を理論的背景にもつ家族向けプログラムであり, 本人の有害な物質使用を減らすこと, 本人が治療を開始すること, 家族の機能を向上させることを主要目標としている (Meyers et al. , 1996) 。日本では 2012 年に初めて翻訳本が出版され, その後物質依存 (松本, 2014) , 社会的ひきこもり (野中他, 2013 ; 境他, 2015) , 発達障害 (山本, 2014) への適用の報告がされた。

しかし, 当該研究開始時の 2017 年時点では, 未だ日本での CRAFT の普及は緩やかで研究も少ない状況だった。公認ワークショップは日本では通算 2 回しか開催されておらず, 公認ワークショップ受講後にスーパーバイズを受けることで認定される公認 CRAFT セラピストについては, 日本にはまだそのシステムが導入されておらず, 公認 CRAFT セラピストは日本に一人もいない状態だった。したがって上記のように CRAFT の報告が日本でなされているといっても, 介入の質の保障がされていない信頼性の低い研究と言わざるを得ない状態だった。

CRAFT が日本で普及されづらい要因を, 日本および海外で CRAFT を使用している支援者へのインタビューの比較から分析したところ, 日本では「トレーニング費用負担」「英語の壁」「ジェネラリストとスペシャリストの考えの違い」という課題があると考えられた (山本, 2018) 。また, 日本で独自に使用されるようになった社会的ひきこもりへの適用可能性や課題についても十分に整理されておらず, 検討する必要があると考えられた。

2 . 研究の目的

本研究は CRAFT の普及, 及びトレーニングシステムの構築を日本で行い, その後信頼性が保障された CRAFT の臨床試験を日本で行いその効果を検証することを目的とする。その際, 従来の依存症への適用と日本で独自に使用されるようになった社会的ひきこもりへの適用の両方を行い比較し, 社会的ひきこもりへの適用可能性や課題についても検討を加える。

以上を段階的に行うために, 以下 (1) ~ (5) の小目標を設定する。

- (1) ウェブ上で CRAFT の紹介動画を掲載するなどし, 日本で気軽かつ安価に CRAFT に触れられる機会をつくる
- (2) CRAFT 公認ワークショップを年間 1 回以上開催するとともに, CRAFT 公認セラピスト養成システムを日本で構築し, 質が保障された CRAFT の普及を目指す
- (3) CRAFT 公認セラピストやそれを目指しているひとたちのネットワークをつくり, 研鑽し合える場をつくる
- (4) 依存症領域と社会的ひきこもり領域を対象とした臨床試験を行いその効果を検証する
- (5) CRAFT の今後の日本での普及可能性について, 日本で行われている既存の認知行動療法との比較や実現可能性の面から整理する

3 . 研究の方法

上記研究の目的で示した小目標 (1) ~ (5) について, それぞれ以下の方法で実施する。

- (1) 「ウェブ上で CRAFT の紹介動画を掲載するなどし, 日本で気軽かつ安価に CRAFT に触れられる機会をつくる」の方法
日本において CRAFT の普及啓発や, CRAFT 公認ワークショップや CRAFT 公認セラピスト養成システムを運営する団体を立ち上げる
当該団体のウェブページを作成する
当該団体のウェブページで, CRAFT 公認ワークショップや CRAFT 公認セラピスト養成システムの案内告知を行う
当該団体のウェブページに CRAFT の紹介動画を掲載する
- (2) 「CRAFT 公認ワークショップを年間 1 回以上開催するとともに, CRAFT 公認セラピスト養成システムを日本で構築し, 質が保障された CRAFT の普及を目指す」の方法
CRAFT 公認ワークショップを年 1 回以上開催する
CRAFT 公認セラピスト養成システムを日本に導入し運営する
上記 (2) に先立ち, オランダ語で出版されている CRAFT セラピスト向けの臨床ガイドブックを翻訳し出版する。
- (3) 「CRAFT 公認セラピストやそれを目指しているひとたちのネットワークをつくり, 研鑽し合える場をつくる」の方法
全国規模, または地方規模の実践交流会を定期的に企画する
- (4) 「依存症領域と社会的ひきこもり領域を対象とした臨床試験を行いその効果を検証する」

の方法

CRAFT 公認ワークショップを受講済みの社会的ひきこもり領域の支援者と依存症領域の支援者に研究協力支援者になってもらい、CRAFT 公認セラピスト養成システムを利用しながら介入研究を行ってもらおう。介入対象家族の人数は社会的ひきこもりと依存症各 30 人とし、無作為化比較試験を行う。効果測定指標としては、家族の生活の質尺度、本人の問題となっている行動の状況を測定する尺度、本人の適応的な行動の状況を測定する尺度で測定する。尚目標とする人数の介入対象家族が集まらない場合は、研究手法をシングルケーススタディに変更し、家族による自由記述なども含めて質的・量的に介入の効果を検討することとする。また、CRAFT 公認セラピスト養成システムにおいては、トレーナー、トレーニー、コーダーは全て匿名で、セッションテープのコードに基づき行われるため、それとは別にグループスーパービジョンの会を適宜開催し、養成途上の研究協力支援者たちが気軽に公認トレーナーから助言を受けたり、支援者同士交流を持ったりする場とする。

- (5) 「CRAFT の今後の日本での普及可能性について、日本で行われている既存の認知行動療法との比較や実現可能性の面から整理する」の方法
CRAFT がプログラムとして存在する意義について、つまり既存の認知行動療法プログラムを支援者が適宜組み合わせ使用することと CRAFT プログラムを実施することの異同について、シンポジウムを開催し議論する。
上記(4) 介入研究終了後から 3 か月以内に、研究協力支援者に CRAFT の実用可能性についての評価を無記名で行ってもらおう。
上記(4) 介入研究終了後から 3 か月以内に、研究協力支援者に CRAFT の実用可能性についてインタビュー調査を行い、社会的ひきこもりと依存症を対象とした場合の異同や課題について分析する。

4. 研究成果

- (1) 「ウェブ上で CRAFT の紹介動画を掲載するなどし、日本で気軽かつ安価に CRAFT に触れられる機会をつくる」の結果
2018 年 1 月 5 日 A/CRAFT ASIA を設立し、2018 年 5 月 10 日同団体ホームページを開設した。ホームページでは CRAFT 公認ワークショップや CRAFT 公認セラピスト養成システムの案内告知を行っている。また同ホームページ上に CRAFT の開発者である Dr. マイヤーズと CRAFT 公認トレーナーである Dr. ローゼンによる CRAFT の紹介動画を日本語字幕付きで掲載した。
- (2) 「CRAFT 公認ワークショップを年間 1 回以上開催するとともに、CRAFT 公認セラピスト養成システムを日本で構築し、質が保障された CRAFT の普及を目指す」の結果
2018 年度は CRAFT のベースになる Community Reinforcement Approach (CRA) の公認ワークショップを 1 回開催し 21 名の参加を得た。2019 年度は CRAFT 公認ワークショップを 1 回開催し 27 名の参加を、2020 年度は CRAFT 公認ワークショップを 1 回開催し 25 名の参加を、2021 年度は CRAFT 公認ワークショップを 2 回開催し計 32 名の参加を得た。CRAFT 公認セラピスト養成システムについてはオンラインシステムの不具合などから当初予定よりも導入が遅れてしまい、2021 年 4 月 4 日から稼働を始めた。オランダ語で出版されている CRAFT セラピスト向けの臨床ガイドブックを翻訳し、2021 年 9 月 21 日に出版した。尚著者と出版社の了解を得て、研究協力支援者には出版前の草案を渡し、これに基づき CRAFT を行ってもらった。
- (3) 「CRAFT 公認セラピストやそれを目指しているひとたちのネットワークをつくり、研鑽し合える場をつくる」の結果
2019 年 4 月 14 日に CRAFT に関する公開講座を 2021 年 10 月 30 日にオンラインの CRAFT 事例検討会を開催し、それぞれ 150 名と 26 名の参加を得た。
- (4) 「依存症領域と社会的ひきこもり領域を対象とした臨床試験を行いその効果を検証する」の結果
【方法】CRAFT 公認ワークショップを受講済みの社会的ひきこもり領域の支援者 5 名と依存症領域の支援者 4 名に研究協力支援者になってもらい、CRAFT 公認セラピスト養成システムを利用しながら 1 年間の介入研究を行ってもらった。またグループスーパービジョンを介入前に 1 回、介入中に 3 回、介入終了後に 2 回、計 6 回実施した。
研究協力支援者には、CRAFT を上述のガイドブックに沿って実施してもらった。CRAFT の 1 回あたりの時間や頻度は、一般的には支援者と家族のニーズや状況によって柔軟に変更されるが、当該研究のプロトコルにおいては月 1~2 回、計 8 回のセッションを基本とし、最大 12 回までセッションを行うことができるとした。また支援者と家族の個別セッションが含まれていれば、グループセッションの併用やパートナー同伴でのセッション、オンラインでのセッションなども使用できることとした。
家族の選択基準はオリジナルの CRAFT の臨床研究 (Meyers et al., 1998) を参考に、以下を全て満たす人とした：一親等の親族 (親、子供、または兄弟)、親密なパートナー (既婚または未婚、異性愛者、または同性愛者)、または親しい友人 / 支援者のいる施設から移動時間

2時間以内に居住地がある / 過去90日間の少なくとも40%で本人と接触し(同居の場合は無条件で満たす。別居の場合、対面での接触の他に電話やメール、SNSでの連絡を含めて算出)、次の90日間で予想される変更がない / 18歳以上(家族と本人の両方) / 本人が社会的ひきこもり状態かつ・または依存状態である / 研究に参加する意思がある / インフォームドコンセントを提供する能力がある。除外基準は以下とした: 家族自身も社会的ひきこもり状態かつ / または依存状態である / 家族自身が現在統合失調症またはその他の精神障害のDSM-IV基準を満たし、精神病またはその他の状態の存在が介入を理解し参加する能力を制限すると研究協力支援者によって判断される / 本人が過去3か月の間に社会的ひきこもりや依存症の問題で支援や治療を受けたことがあるか、現在治療を受けいれる意思があるという明白な証拠がある。または、刑法犯や少年法、精神保健福祉法により本人の意思に関係なく強制的に心理支援がすでに行われているかまたはその予定がある / 家族自身の読解力が不十分で、テキストや心理検査を理解できない(義務教育卒業程度の読解力が見られない)。

デモグラフィックデータとして家族の年齢、続柄、本人の年齢、状態像の情報を集めた。効果測定指標としては介入前、介入後、介入終了後2か月後の時点で、家族のQOL26(世界保健機関・精神保健と薬物乱用予防部編, 1997)を、また社会的ひきこもりについては家族が評定したひきこもり行動チェックリスト(以下、HBCL:境他, 2004)とHBCLに関するエフィカシー(境・坂野, 2009)、ABS-H(Nonaka et al, 2018)を測定した。依存症についてはHBCLやHBCL、ABS-Hのような尺度が存在しなかったため申請者が作成した4件法4項目の依存行動尺度と、その依存行動に関する11件法4項目のエフィカシー尺度を測定した。これらの尺度は全て家族が記入するものである。QOL26の得点が高いほど幸福度が高く、HBCLと依存行動尺度の得点は高いほど対象とする問題行動状況が強く、HBCLエフィカシーと依存行動エフィカシーの得点は高いほど自己効力感が高く、ABS-Hの得点は高いほど適応行動が多く見られることを示す。また介入終了時および終了2か月後に家族にCRAFTについての感想やその時点での状況を自由記述で記載してもらった。

倫理的配慮については、家族への研究協力の説明は書面と口頭で行われ、申請者の所属機関倫理審査委員会で倫理的配慮が確認された(臨 2004)。

【結果】研究協力支援者9名のうち社会的ひきこもり領域の支援者3名が計4名の家族を、依存症領域の支援者3名が計3名の家族を対象に介入研究を行った。各家族(ID1~7)のQOLの平均、HBCL、HBCLエフィカシー、ABS-H、依存行動尺度、依存行動エフィカシーについての、介入前、介入後、2か月後フォローアップ時の推移を図1に示す(ID2のHBCL、ABS-Hデータは欠損)。

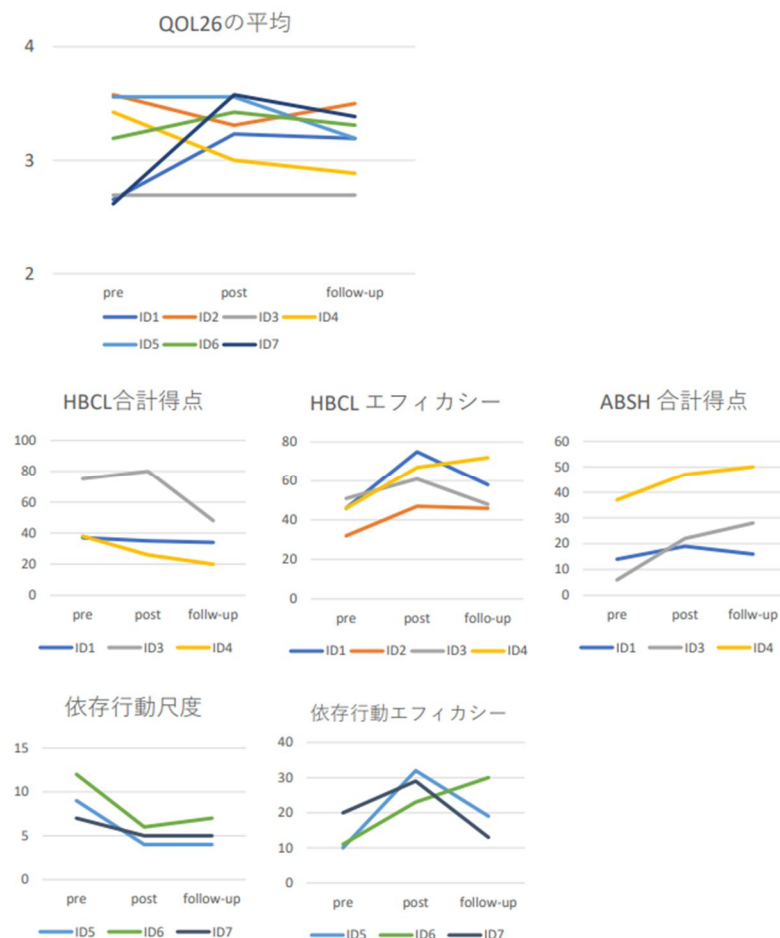


図1 各効果測定尺度の介入前、介入後、2か月後フォローアップ時の推移

(5)「CRAFTの今後の日本での普及可能性について、日本で行われている既存の認知行動療法との比較や実現可能性の面から整理する」の結果

2019年9月1日に行われた日本認知・行動療法学会の自主シンポジウムにおいて、CRAFTがプログラムとして存在する意義について、つまり既存の認知行動療法プログラムを支援者が適宜組み合わせる使用することとCRAFTプログラムを実施することの異同について検討した。その結果CRAFTの特徴は、本人が受療しない場合の家族支援として非常に包括的かつ体系的にデザインされていること、コミュニティベースで支援が検討されていること、家族も本人もコミュニティから強化を受け続けることができるよう計画されることと考えられた。一方で、それらの特徴が他の認知行動療法には全く無いとは言い切れず、またCRAFTが従来の認知行動療法と異なると主張することの意義も不明瞭であることから、そう主張することに焦点化するよりも、「依存症領域で効果が検証されているプログラムが社会的ひきこもりにも有効である」ことを実証することの方が有用なのではないかとの指摘があった。

上記(4)の介入研究終了後から3か月以内に研究協力支援者に実用可能性の評価(Weiner et al, 2017)を無記名でもらった。尚この評価については開発者の許可を得てバックトランスレーションの手続きを踏み、日本語版を作成して用いた。その結果、社会的ひきこもり領域の研究協力支援者と依存症領域の研究協力支援者の傾向に大きな違いはないように見受けられた。いずれの領域の支援者もAcceptability of Intervention Measure (AIM)は高い得点に固まっていたが、Intervention Appropriateness Measure (IAM)とFeasibility of Intervention Measure (FIM)は評価がやや分散していた。これらのことから、クライアントへの適合性や実装可能性を考えた時にCRAFTには課題があることが推察された。介入研究終了後から3か月以内に実施した研究協力支援者へのインタビュー調査では、具体的な課題として、リクルートの難しさ、日本と欧米の支援者養成システムの全般的な違いの影響、不正確にCRAFTが実施されることのクライアントへの悪影響、新型コロナウイルス感染拡大の影響、日本における公認セラピスト養成システムの課題、社会的ひきこもりに応用して使用する際の課題、日常臨床の中で臨床研究に協力する際の課題などが聞かれた。明らかになった課題を整理し、今後より大規模な臨床研究を実施していきたい。

<引用文献>

- 松本俊彦(2014):薬物依存症(特集 精神療法としての助言や指導:私はどうしているか).臨床精神医学, 43(8), 1161-1166.
- Meyers RJ et al. (1996): Community reinforcement training with concerned others. In Hasselt VB & Hersen M(eds.) Source of psychological treatment manuals for adult disorders. New York: Plenum Press. Pp.257-294.
- Meyers RJ et al. (1998): Community reinforcement and family training (CRAFT): engaging unmotivated drug users in treatment. Journal of Substance Abuse. 10, 291-308.
- 野中俊介他(2013): ひきこもり状態にある人の親に対する集団認知行動療法の効果.精神医学, 55, 283-291.
- Nonaka S et al. (2018): Assessing adaptive behaviors of individuals with hikikomori (prolonged social withdrawal): development and psychometric evaluation of the parent-report scale. International Journal of Culture and Mental Health, 11(3), 280-294.
- Weiner BJ et al. (2017): Psychometric assessment of three newly developed implementation outcome measures. Implementation Science, 2017 Aug; 12(1): 108. doi: 10.1186/s13012-017-0635-3.
- 齊藤万比古(2010): ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン.厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究」(主任研究者 齊藤万比古).
- 境泉洋他(2015): ひきこもり状態にある人の親に対するCRAFTプログラムの効果.行動療法研究, 41(3), 167-178
- 境泉洋他(2004): ひきこもり行動チェックリスト(HBCL)の開発および信頼性と妥当性の検討.カウンセリング研究, 37, 210-220.
- 境泉洋・坂野雄二(2009): ひきこもり状態にある人の親のストレス反応に影響を与える認知的要因.行動療法研究, 35(2), 133-143.
- 世界保健機関・精神保健と薬物乱用予防部編(1997): WHO Quality of Life 26. 田崎美弥子・中根允文(監修).
- 山本彩(2014): 自閉症スペクトラム障害特性を背景にもつ社会的ひきこもりへCRAFT(Community Reinforcement and Family Training)を参考に介入した二事例.行動療法研究, 40, 115-125.
- 山本彩(2018): 外国で開発された対人援助プログラムが日本で普及するときにおこること~Community Reinforcement and Family Training (CRAFT)の場合~札幌学院大学心理学紀要, 1(1), 1-17.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山本 彩	4. 巻 20(6)
2. 論文標題 ひきこもりの支援 危機介入	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 733-737
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本 彩	4. 巻 62 (1)
2. 論文標題 特集：子どものための認知行動療法 児童・青年期の発達障害における行動療法・CRAFTの実際	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 64-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本 彩・依谷 知実・中村 裕子・久蔵 孝幸	4. 巻 62 (2)
2. 論文標題 発達障害（疑い含む）がある人への司法・医療・福祉連携の実態 ～いわゆる「入口支援」「出口支援」に関するアンケート調査から～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 222-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Aya Yamamoto, Hendrik G. Roozen	4. 巻 4
2. 論文標題 A Brief CRAFT Parental Support Program Focused on Helping Children with Autism Spectrum Disorder and Other Neurodevelopmental Problems: a Pilot Study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Advances in Neurodevelopmental Disorders	6. 最初と最後の頁 15-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s41252-019-00122-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山本 彩	4. 巻 60(5)
2. 論文標題 第59回日本児童青年精神医学会総会特集() シンポジウム9: 青年期の素行問題について~外来でできること「S09-4.多機関異業種連携のあり方と危機介入」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 563 - 568
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本 彩	4. 巻 41(4)
2. 論文標題 学会企画シンポジウム: 最初の診断を行うことの意味を多職種連携支援の観点から問う 指定討論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 272 - 273
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 依谷知実・山本彩	4. 巻 1(2)
2. 論文標題 自閉スペクトラム症を背景にもつ 犯罪行為者の社会復帰支援にかかわる現状と課題 デルファイ調査における自由記述の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 札幌学院大学心理学紀要	6. 最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 5件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山本 彩
2. 発表標題 地域の発達障害支援における多職種連携シリーズ第3弾: 最初の診断を行うことの意味を多職種連携支援の観点から問う 指定討論
3. 学会等名 発達障害学会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 企画者 山本彩
2. 発表標題 CRAFTは、既存の認知・行動療法の技法の組み合わせと何がどう異なるのか？ 自主シンポジウム
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本彩、俵谷知実、久藏孝幸
2. 発表標題 発達障がい（疑い含む）がある人への司法・医療・福祉連携の実態～いわゆる「入口支援」「出口支援」に関するアンケート調査から～ポスター発表
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本 彩
2. 発表標題 多機関異業種連携のあり方と危機介入
3. 学会等名 日本児童青年精神科・診療所連絡協議会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本 彩
2. 発表標題 多機関異業種連携のあり方と危機介入
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 境 泉洋・山本 彩
2. 発表標題 ワークショップ ひきこもりのCBT
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金澤 潤一郎、山本 彩、池田 浩之、千田 若菜
2. 発表標題 ワークショップ 就労支援における認知行動療法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大野 裕史、金澤 潤一郎、山本 彩、池田 浩之、千田 若菜
2. 発表標題 自主シンポジウム 就労支援の認知行動療法から考える科学と実践
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 境 泉洋、野中 俊介、山本 彩、平生 尚之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 CRAFTひきこもりの家族支援ワークブック [改訂第二版]	

1. 著者名 H.G. ローゼン、R.J. メイヤーズ、J.E. スミス、松本 俊彦、境 泉洋、佐藤 彩有里、山本 彩、白石 英才	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 112
3. 書名 CRAFT 物質依存がある人の家族への臨床モジュール	

〔産業財産権〕

〔その他〕

A/CRA/FT ASIAのウェブサイト https://www.acraftasia.org/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	境 泉洋 (Sakai Motohiro) (90399220)	宮崎大学・教育学部・教授 (17601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 CRAFTの公認ワークショップ、セラピスト養成システム、臨床研究についての打ち合わせ	開催年 2018年～2021年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------